

**侵攻1年のタイミングでポプートニク東京による戸別訪問に関連した記事、および
2023年2月18日に実施した特別企画に関連した新聞記事**

- 2023年2月17日 産経新聞
- 2023年2月19日 産経新聞
- 2023年2月19日 朝日新聞デジタル
- 2023年2月21日 毎日新聞朝刊
- 2023年2月22日 時事通信デジタル
- 2023年2月22日 読売新聞夕刊 西日本版
- 2023年2月22日 読売新聞夕刊 東日本版
- 2023年2月25日 毎日新聞デジタル
- 2023年2月25日 産経新聞
- 2023年2月26日 毎日新聞朝刊

避難民250世帯訪問の日本人

阪神大震災で後悔

心に寄り添い対話

ロシアによる軍事侵攻で祖国を追われたウクライナ避難民に、心を寄せ続ける日本人女性がいる。日本YMCA同盟の横山由利亜さん(53)が、この間に戸別訪問した避難民は250世帯以上。避難生活が長期化する中、大小さまざまな困りごとに親身に耳を傾ける。その胸中には28年前、自らの故郷を襲った阪神大震災の復興支援活動で味わった後悔と教訓があった。

(外崎晃彦、写真も)
—1面参照



ウクライナ侵攻から間もなく1年を迎える2月1日、横山さんの姿は東京都北区的都営団地にあった。戦禍の首都キーウを抜け出した高齢夫婦が昨年4月から身を寄せていた。「家の前に爆弾が落ちるまでは日本に来るなんて考えもしなかったのよ」。妻(72)が現地での壮絶な体験を真剣な表情で訴え、横山さんは「うん」と相づちを打つ。

ウクライナ避難民宅を訪れ、夫婦の話に耳を傾ける横山由利亜さん(左)
—1日、東京都北区

この団地に避難民は夫婦のみ。都内で暮らす娘家族を頼っての来日だったが、同居はできず、「両親が孤立してないか心配」という娘の依頼で、横山さんが初めて駆け付けた。夫(72)が「心臓の持病が悪化していたけれど、現地は混乱していてとても入院なんてできなかった。日本に来てから手術したんだ」と割って入る。「医師

と言葉が通じなくても手術は怖くなかった？」と聞く横山さんに、夫は手ぶりを交えて「全然だよ」とおどけてみせた。横山さんは「友達のように、いつでも声をかけてほしい」と笑顔で伝えた。

心身のバランス

国内での避難民受け入れに伴い、日本YMCA同盟は入国手続きや住居確保の手伝いを開始。執行理事の横山さんは支援プロジェクトの責任者に就いた。昨年7月に都と業務提携すると、都内の避難民の戸別訪問に乗り出し、横山さんが一手に引き受けている。1回に約2時間。相手は心を開くまで根気強く付き合う。祖国でのつらい体験や避難生活の長期化に心身のバランスを崩す避難民は少なくなく、「訪問先では相手に泣かれてしまうことがほとんどだ」という。避難民が自宅にこもりがちになっていたところ、今冬の暖房費高騰が原因で同居する身元引受人の日本人との関係がこじれ、横山さんが仲裁に入ったこともある。横山さんは「滞在の長期化を想定していないことによるトラブルが増え始めた」と打ち明ける。

片付け優先し…

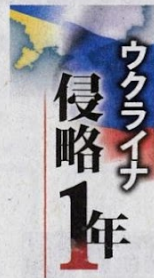
横山さんが相手に寄り添い、話を聞くことにこだわるのは、出身地・神戸を直撃した阪神大震災の復興支援活動で味わった忘れられない思いがあるという。都内の大学を卒業後、日本YMCA同盟に入ってから2年。学生ボランティアを連れて被災した高齢女性宅を訪れた際、学生の一人が「話し相手を欲しがっているようだ」と報告してきたのに、横山さんは片付け

業務を優先し、話をよく聞かずに離れてしまった。「そのことがずっと心に引っかかっていて」と横山さん。業務より話を聞くことの大切さに気づき、悔いが残った。以降、東日本大震災や熊本地震などの現場では被災者の言葉に耳を傾けることに専念した。その真摯な姿勢は、ウクライナ避難民の心も捉えている。都の担当者は「『心配だ』といえは、すぐ様子を見に行ってくれる。相談の中から課題をしっかりと整理してくれるのでありがたい」と感謝する。

また訪問できていない避難民もいる。軍事侵攻の早期終息を祈りつつ、地道な活動を続けていくことに横山さんの決意は固い。「少しでも多くの避難民の話を聞き、心のよりどころになればいい」

「避難長期化に備えを」

日本YMCA同盟 支援考えるフォーラム開催



ロシアによるウクライナ
 侵攻から24日で1年となる
 の前に、ウクライナから
 の避難民支援を行ってきた
 日本YMCA同盟は18日、
 避難民との共生や支援のあ
 り方を考えるフォーラムを
 新宿区で開催した。避難民
 14人をはじめ、支援組織、
 行政関係者ら約50人が参
 加。登壇者から「避難の長
 期化に備えが必要だ」など
 の声が聞かれた。

避難民らによるディスカ
 ツションでは、就業や教
 育、メンタル、生きがいと
 いった問題を議論。日本に



住む息子を頼ってキーウか
 リヤさん(49)は、「来日し
 ら来日したベルナツカ・ユ
 たときは数カ月で帰国でき

ウクライナ避難民との共生を考えるフォーラムに参加した避難
 民や関係者ら —18日午後2時24分、新宿区（外崎晃彦撮影）

ると信じていた。（日本で
 の）生活をゼロから構築す
 る必要に迫られている」と
 訴えた。

本国で弁護士を務めてい
 たウリバチョバ・イリーナ
 さん(40)は、避難民の就業
 を巡る状況について「ビザ
 は1年単位での発給。長期
 間の生活設計を立てるのが
 難しい状況だ。日本でのさ
 らなる滞在の見通しが立た
 ない」とした。

日本側の支援組織の代表
 者らによる討論では、都地
 域活動推進課の村田陽次課
 長代理が「博物館や劇場に
 行くなど生活に余裕を作っ
 てもらうことが重要。避難
 の長期化への備えを考えて
 いる」と指摘。日本YMCA
 A同盟の執行理事、横山由
 利亜さんが「言葉の違いに
 よる就業の難しさなどの問
 題は深刻さを増している。
 行政や民間、個人だけでは
 なく、一緒になって解決し
 ていかなければならない」と
 総括した。

朝日新聞デジタル > 記事

キャリアや子の教育どうすれば 日本での生活、悩むウクライナ避難者

植松佳香 2023年2月19日 15時00分



避難から約1年が経ち、見えてきたことを話すウクライナからの避難者たち。左がベルナツカ・ユリヤさん=2023年2月18日、東京都新宿区、植松佳香撮影



ロシアによるウクライナ侵攻から24日で1年。日本にも約2300人のウクライナ人が逃れてきたが、避難の長期化に伴って様々な課題も浮き彫りになってきた。それらをいかにして乗り越えていくか、当事者や支援者らが語り合うイベントが18日、東京・新宿区で開かれた。

「1年前は、命と子どもを守ることが最優先でしたが、今は（日本での）生活をゼロから構築するというタスクに直面しています」。そう話したのは、ウクライナの首都キーウ（キエフ）出身のベルナツカ・ユリヤさん。昨年4月に息子を頼って日本に避難してきた。

ウクライナではIT会社を経営していて、今もオンラインで仕事を続ける。その一方で、ウクライナからの避難者らを対象に、知見を生かしてITのスキルを教える活動もしている。避難者は支援や援助を受けるだけでなく、自分たちのキャリアを生かして、日本に恩返しをしたいという気持ちが強いという。

14歳の息子と日本に避難してきたというオレーナさんは、日本語学校とウクライナの学校のオンライン授業で息子が疲れ切っていることを心配していた。「どう彼を助けたらいいか、悩みます」

避難が長期化し、いつ母国に帰れるかも分からないなか、仕事や教育など、日本でどう生きていくべきか悩む人たちが増えてきているようだ。

イベントを主催した公益財団法人・日本YMCA同盟は、これまでウクライナからの避難者約900人の支援をしてきた。支援プロジェクトの責任者である横山由利亜さんは「母子が多いので、教育をめぐる相談が多い。中高年は持病の悪化もある。都営住宅に暮らす避難者の半数は1人世帯で、孤立も課題だ」と指摘した。

イベントに参加した支援者側からは、課題を当事者と一緒に考えていくことの重要性や、IT大国でもあるウクライナの人たちの能力を生かせる道があるのではないか、といった意見が出た。

認定NPO法人「難民を助ける会」の桜井佑樹さんは、今の支援状況において日本では「ウクライナの人たちは特別」と指摘したうえで、「日本がどういう社会になりたいかという目標を定めたうえで、今どうするのか考える必要がある。これを機に、難民支援政策をしっかりと議論するのが大事だ」と話した。（植松佳香）





日本の生活について話すウクライナ避難民のイリーナ・ウバ
チヨバさん（左）とユリヤ・ペルツカさん（右）が記者会見で話している様子。

支援団体が報告



「避難民の孤立化防いで」

ロシアによるウクライナ侵攻で、日本に避難してきたウクライナ人を支援する「日本YMCA同盟」が都内で報告会を開いた。避難民からの聞き取りで見えてきた課題を紹介。支援を受ける避難民たちも、長期化する日本での暮らしを振り返り、仕事や子どもの教育の悩み、今後の目標を語った。

【山田泰隆】

YMCAは来日支援や日本語学習の機会の提供、都内の避難民の戸別訪問などをしてきた。戸別訪問では、避難民にゴミ出しのルールを教えたり、生活状況を確認したりしながら就労や教育など幅広い相談に応じてきた。都と協定を結んで情報を共有する。

日本の生活長期化 悩みや目標

18日の報告会ではまず、戸別訪問を続けるYMCAの横山由利亜さんが支援概要を報告した。都営住宅に住む避難民は過半数の世帯が一人暮らしで、孤立化を防ぐ支援が欠かせない。避難民から一人だけでも生き残ってほしいと送り出され、来日直後に家族全員が亡くなった30代の女性が

も出会った。ぼうぜん自失の状態だったという。「戦争の恐怖を越えながら新しい環境に适应する不安は、どんな大きな支援でも消えない。それを心して避難者一人一人の思いを聞きたい」と話した。



ウクライナ避難民の支援について語る日本YMCA同盟の横山由利亜さん

中高年の避難民を中心に高齢化やストレスによる発病などで、介護や医療の費用が問題になる可能性もあるという。日本に呼び寄せた家族の精神面や金銭的な負担にも目を向ける必要があると指摘した。

報告会には14人の避難民が参加し、5人の女性が日本語での自己紹介を交えながら、それぞれの思いを語った。自身も避難民でありながら心理カウンセラーとして仲間をケアする女性は「ウクライナ人はクリエティブで働き者。日本に貢献できると思うが、戦争で心の傷が深い人もい

る。つらく閉じこもりがちな人にもYMCAは訪ねてきてくれるのでとてもありがたいうえに支援に感謝したい」と話した。14歳の息子が子どもらしい時間を過ごせていない状況を説明。「日本語学校と日本の中学校での授業に加え、ウクライナの学校のオンライン授業にも通われ、疲れ果てている。スポーツや楽しみの時間が少ない」と悩みを語った。

また、IT会社を営んでいるユリヤ・ペルツカさんや弁護士イリーナ・ウリバ

天気

23日(木) 24日(金) 25日(土) 26日(日) 27日(月)

千代田 三鷹 八王子

インフルエンザ

23日(木) 24日(金) 25日(土) 26日(日) 27日(月)

千代田 三鷹 八王子

洗濯

23日(木) 24日(金) 25日(土) 26日(日) 27日(月)

千代田 三鷹 八王子

乾燥肌

23日(木) 24日(金) 25日(土) 26日(日) 27日(月)

千代田 三鷹 八王子

千代田 14.7/8.9℃ 三鷹 14.2/5.7℃ 八王子 13.4/3.5℃ 青梅 13.1/3.1℃ 大島 18.6/9.3℃

【速報】次期日銀総裁候補の植田氏は国会の所信聴取で「現在日銀が行っている金融政策は適切だ」と語った

ウクライナ避難民、悩みに変化 人生設計見通し立たず「検証必要」と東京の支援団体・侵攻1年

2023年02月22日07時09分

トップ

記事一覧へ

シェア

ランキング

コメント



ウクライナから日本に避難しているゼムリヤチェンコさん夫婦から、生活の悩みなどを聞く日本YMCA同盟の横山由利亜さん（右）＝15日、東京都足立区

ロシアのウクライナ侵攻から24日で1年。日本に逃れた避難民の苦悩が続く中、支援団体の活動も変化している。日本にいる避難民2185人（15日時点）の約4割に当たる896人を支援する日本YMCA同盟（東京都新宿区）によると、侵攻の長期化に伴い、今後の人生設計など、避難民の悩みの内容が変化しており、対応を迫られているという。＜下へ続く＞

イベントの困ったを丸っとお任せ

マックスパート

[詳しくはこちら](#)

15日、YMCAで支援計画の責任者を務める横山由利亜さん（53）が都営住宅で暮らすゼムリヤチェンコさん夫婦を戸別訪問した。北東部ハリコフ出身で、昨年4月末に来日。侵攻前、夫ミハイロさん（32）は鉄道会社で整備士として働き、妻オレーナさん（30）はプラネタリウム職員だった。来日後、コンビニでのアルバイトなどで生計を立てたが、避難生活が長引き定住を考え始めた。

避難の50代女性、日本語学習に奮闘 同年代と「つながり」求める―ウクライナ侵攻1年

「日本で生活する以上、日本のために何かしたい。仕事をするに当たり、言葉が分かなければ何もできない」とミハイロさん。夫婦で週5回、日本語の授業を受けるなど、将来を見据え努力してきた。それでも「ウクライナの状況を見て、帰って戦わねばという思いを抱くこともある」と胸の内を語る。

横山さんによると、当初は入国支援や日本語教育など生活を始めるための支援が中心だったが、「就業や子どもの教育など、人生設計に関わるような相談が増えている。個別化、深刻化しており、難しい段階に入っている」と話す。

また、日本にいる避難民は女性が7割超を占め、母子のみも多いが、母親は限られた職種しか紹介されない上、新学期を前に子どもが日本とウクライナのどちらで教育を受けるか選択を迫られているという。

横山さんは「日本の社会で避難民を受け入れることについて、どのようなハードルがあるか検証する時期に来ている」と危機感を募らせる。

社会

ウクライナ情勢

コメントをする

関連記事

過小評価させないのが抑止力 ウクライナ侵攻-陸自トップ

ロシアの中立参加に「強い懸念」 IOCに日米英など34カ国

[PR]ダム組織には"〇〇できる人"がいない。売上2倍&求職者急増企業の「福島が笑えば、...

アクセスランキング 社会



黒く、多種多様な高分子 りゅうぐうの有機物分析―米サイエンス誌が特集

笑顔広がる「おせっかい」

日本で避難民支援の女性

彼女が姿を見せると笑顔が広がる。友達を囲むように自然と人の輪が生まれる。ロシアの侵略で日本に逃れたウクライナ避難民の支援に駆け回る横山由利亜さん(53)は、古里を遠く離れた人々にとって、そんな存在になった。「私がやっていることは、おせっかい」。活動スタイルの原点には、過去の苦い経験がある。

(米山理紗)

ウクライナ侵略

1年

「ユリアサン!」。今月18日、東京・四谷にあるビルの一室に入った避難民たちが、待ち受けた横山さんに次々と声をかけた。



イベント会場で参加者との記念写真に納まる横山さん。スタッフとして最初は端に立っていたが、避難民たちに呼ばれ、いつのまにか中央にいた(18日午後、東京都新宿区で)＝木田諒一朗撮影

寄り添うこと 阪神大震災で知った

横山さんが所属する公益財団法人「日本YMCA同盟」(東京)が、避難民や自治体関係者らを招いて開いたイベントの会場。ウクライナ語を話せない横山さんに、避難民たちが片言の日本語で近況を伝え、スマートフォンの写真を見せると、笑いが湧き起こった。

「病院に一緒に行って」「書類が読めないの」。彼女のもとには休みなく、異国の生活に困った避難民から連絡がある。

横山さんが支援に関わることになったきっかけは、昨年2月24日の8日後にかかってきた1本の電話だ。高齢の義母を日本に避難させたいという、埼玉県のウクライナ人男性からの相談だった。「とにかくやってみよう」。女性や子どもが冬空の下、国境へと歩く姿を見て、「この人たちは一体どうなるだろう」と心配していた。

*

国際NGOのYMCAは、120か国・地域に組織がある。現地の仲間と連絡を取り、日本の査証(ビザ)取得などを手助けた。義母は約2週間後、羽田空港に到着。親子が再会を喜ぶ場面を見守った。

夫婦は東京住まい。不安で心細かったはずだ。「一緒にアルバムをのぞいて話しかけていけば、少しでも心を軽くすることができたのでは」。そう気付いた。

*

横山さんが避難民支援に専従するのは、この頃からだ。昨年7月からは東京都と組み、都営住宅などで暮らす避難民を訪ねて回る。「この服、自分で縫ったの? すごい」。友達のように語りかけるのは、駆け出した頃の苦い思い出がある。

*

1995年1月に起きた阪神大震災。YMCAに入ってから2年目、東京から神戸に向かった横山さんは高齢の女性宅を訪ね、室内に散らばった本の整理を手伝った。ボランティアの大学生らと拾い上げていると、古いアルバムが出てきた。無事でよかった。女性はアルバムをめくり始めた。

その時、横山さんは「早く片付けてあげたい」との一心で作業の手を止めなかった。女性宅を出た後、大學生の一言にドキリとした。「あの、本当は話がしたかったんじゃないのかな」。女性は一瞬暮らしで、娘の力を信じている。

「周りのささいな気遣いが支えになる。みんなで一つのチームになって乗り越えたい」。「おせっかい」

「おせっかい、笑顔生む



ウクライナ侵略
1年

彼女が姿を見せると笑顔が広がる。友達を囲むように自然と人の輪が生まれる。ロシアの侵略で日本に逃れたウクライナ避難民の支援に駆けつける横山由利亜さん(53)は、古里を遠く離れた人々にとってそんな存在になった。「私がやっていることは、おせっかい」。活動スタイルの原点には、過去の苦い経験がある。(米山理紗)

イベント会場で参加者との記念写真に納まる横山さん。スタッフとして最初は端に立っていたが、避難民たちと呼ばれ、いつのまにか中央にいた(18日、東京都新宿区で)

日本避難民 支援の女性

阪神大震災で知った 被災者の心

横山さんが支援に関わることになったきっかけは、昨年2月24日の8日後にかかってきた1本の電話だ。高齢の義母を日本に避難させたいという、埼玉県のパライナ人男性からの相談だった。「とにかくやってみよう」。女性や子どもが冬空の下、国境へと歩く姿を見て、「この人たちは一体どうなるのだろう」と心配していた。

国際NGOのYMCAは、120か国・地域に組織がある。現地の仲間と連

「ユリアサン!」。今月18日、東京・四谷にあるビルの一室に入った避難民たちが、待ち受けた横山さんに次々と声をかけた。横山さんが所属する公益財団法人「日本YMCA同盟(東京が、避難民や自治体関係者を招いて開いたイベントの会場。ウクライナ語を話せない横山さんに、避難民たちが片言の日本語で近況を伝え、スマートフォン)の写真を見せると、笑いが湧き起こった。「病院に一緒に行つて」「書類が読めないの」。彼女のもとには休みなく、異国の生活に困った避難民から連絡がある。

横山さんが避難民支援に専従するのは、この頃からだ。昨年7月からは東京都と組み、都営住宅などで暮らす避難民を訪ねて回る。



最初に避難を支援し、羽田空港で再会した親子と横山さん(昨年3月中旬) 日本YMCA同盟提供



「この服自分で縫ったの? すい」。友達のように語りかけるのは、駆け出しの頃の苦い思い出がある。

1995年1月に起きた阪神大震災。YMCAに入つて2年目、東京から神戸に向かった横山さんは高齢の女性宅を訪ね、室内に散らばった本の整理を手伝った。ボランティアの大学生らと拾い上げていると、古いアルバムが出てきた。無事よかった。女性はアルバムをめくり始めた。

その時、横山さんは「早く片付けてあげたい」との一心で作業の手を止めなかった。女性宅を出た後、大学の一言にドキリとした。「あの、人、本当は話しかかったんじゃないのかな」。女性は一人暮らしで、娘夫婦は東京住まい。不安で心細かったはずだ。「一緒にアルバムをのぞいて話しかけていれば、少しでも心を軽くすることができたのでは」。そう気付いた。

38歳の頃、認知症の祖母の介護で、当時は神戸にいた母がうつ状態になり、命を絶った。たまに会いに帰っても、母の様子が変わり、はなからた。東京で活動する娘に心配をかけまいとしていたのだろう。「そこまで思い詰めていたの?」。気付かなかった自分を責めた。山手線の駅を繰り返してつづき、眠れない夜をやり過ごした。

どうにか生きてしまえ、うな自分に、同僚や友人たちからは毎朝の「おはよう」メールや、サプライズでイチゴやリンゴが届いた。周りの小さな思いやりが、前を向く力をくれた。そのことを意識して行動するようになったが、横山さんは照れくさそうに言う。

「私は、おせっかいなの。私に戦争を終わらせようとはできないけれど、おせっかいならできるの」

侵略から1年。避難民の心の傷は深い。30歳の女性は、「あなただけでも安全な場所へ」と説得され、昨年末に来日した。その後、残っていた家族全員が攻撃に遭い、亡くなった。葬儀のために一時帰国した彼女は、行き場もなく日本に戻ってきた。引きこもりがちになつた。横山さんは彼女を力づけて、今日まで話しかけている。

日本での暮らしに慣れ始めても、古里に攻撃があるたび気持ちは沈む。母国でキャリアを築いたのに、生かせない人も多い。それでも少しずつ前を向き、「起業したい」などと夢を語ってくれる避難民たちに、「私の方が勇気づけられている」と横山さんは思う。

「周りのささいな気遣いが支えになる。みんなで一つのチームになって乗り越えたい」。「おせっかい」の力を信じている。

「医師に成る」日本語学習帳に刻む決意 あるウクライナ人の覚悟

和田浩明 | 国際 | 速報 | 欧州

毎日新聞 | 2023/2/25 21:41 (最終更新 2/25 21:41)

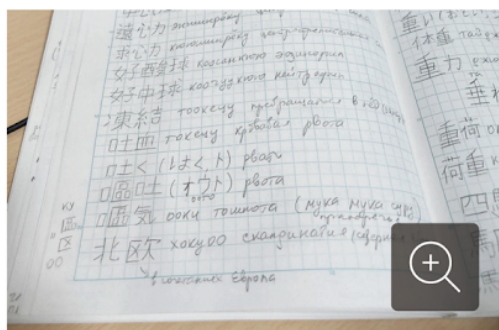
有料記事 1751文字



3月から始まるビジネス日本語と就業スキル向上コースの受講許可書を手にするオレーシャさん（左から2人目）。左は支援する日本YMCA同盟の横山由利亜さん。右側はオレーシャさんの娘アナスタシアさんと夫アルチョムさん＝東京都内で2023年2月8日、和田浩明撮影

20年以上、麻酔の専門医として医療に従事してきた。8年前から医科大で麻酔学を教え、3年前には博士号を取得した。ウクライナ人の女性医師、オレーシャ・ボイツォワさん（42）の人生は順調だった。しかし、今は東京都内の3DKの避難者向け都営住宅に身を寄せ、漢字や平仮名の勉強に取り組んでいる。

学習ノートを見せてもらった。漢字の構造を確認しながら書いたような大きめの文字で「臓器」や「嘔吐（おうと）」、医療用語の「好酸球」といった言葉がつつられている。ウクライナ人だがオレーシャさんが話す母語はロシア語。達筆なロシア語の筆記体で、読み方や意味をびっしりとノートに書き込んでいた。



医師であるオレーシャさんの日本語学習ノートには「好酸球」「好中球」といった医療用語が並ぶ。「嘔気（おうき）」の横には「オオキ」の読み、吐き気を意味するロシア語の単語「тошнота」（トシノター）、「ムカ ムカ スル」の言葉がロシア語の筆記体で書かれていた＝東京都内で2023年2月8日、和田浩明撮影

「専門の麻酔の仕事をするのは難しいのは分かっています。でも言葉を学び、経験を積んでいけば、せめて専門領域の周辺で仕事ができるようになるかもしれない」。日本語を真剣に学ぶのは戦争の長期化、そして避難生活の長期化を覚悟しているからだ。

南部ザポロジエを脱出、自宅近くに着弾

2月上旬の肌寒い午後、避難先の都営住宅にオレーシャさんを訪ねた。「ウクライナでは20年間、麻酔の医者でした」――。ベッドに座って、ゆっくり、だが、しっかりとした日本語を披露してくれた。隣には夫の

◆2023年2月25日毎日新聞デジタル
アルチョムさん（43）、娘のアナスタシアさん（15）がぴったりと寄り添っていた。



ロシア軍のミサイルで破壊された民家の場所には、破片に混ざって家族写真も転がっていた＝ウクライナ南部ザポロジエ州で2023年2月10日、AP



オレーシャさんが住んでいたウクライナ南部ザポロジエ州にある「ザポロジエ原発」。ウクライナ侵攻後、ロシア軍が占拠している＝エネルホダルで2022年11月24日、ロイター

生まれ育ったウクライナ南部ザポロジエを離れ、親子3人で、日本にたどり着いたのは半年前。ロシア軍が郊外のザポロジエ原発を占拠し、攻撃は激しさを増していた。自宅から200メートル離れた場所にも砲弾が降ってきた。家族の安全を考えれば、脱出を決意せざるを得なかった。

日本に縁はなかった。避難希望者向けの交流サイトで、日本で支援を受けられることを知った。ウクライナに近い欧州諸国にはすでに脱出者が殺到していた。欧州で支援を受けるのは容易ではないかもしれない――。「生まれてからずっと暮らしてきた場所を捨てることになる。戻れるかどうか分からない」。2週間悩み抜いた末に日本行きを決めた。

ロシア人がなぜ

ウクライナではゼレンスキー大統領をはじめ、ロシア語を母語とする人が多い。オレーシャさんもザポロジエではロシア語で生活していたし、ロシアには親戚もいる。ロシア人と自分とは、重なり合うように近い関係だと思っていた。

それだけに、ロシア人がなぜ自分たちを攻撃し、戦争をやめようとならないのかが分からない。「いずれ終わるに違いない」。そう願っていた戦争は1年も続いている。

スマートフォンを見て我が目を疑った。1月14日に東部ドニプロで集合住宅がロシア軍のミサイル攻撃を受け、子ども3人を含む40人以上が死亡し約80人が負傷した。この大きな人的被害について、ロシアの知人たちがネットに「（ウクライナ人の数が）少なくなってよかった」と書き込んでいた。

2022年2月の侵攻開始のころ、ロシア各地では市民が抗議デモを繰り広げ、多数が拘束された。しかし今、反戦運動のニュースはロシアからはまったく伝えられなくなった。「『（ウクライナは）ロシアになった方がいい』とネットに書き込んだ人もいました。私たちが敵視するのは



2023年1月14日のロシア軍によるミサイル攻撃で破壊された集合住宅。子どもを含む多数の死傷者が出た＝ウクライナ東部ドニプロで、AP

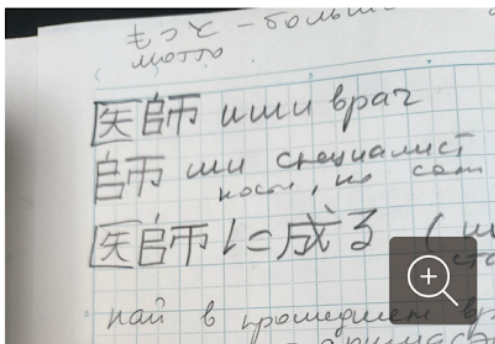
◆2023年2月25日毎日新聞デジタル
ロシア政府だけじゃない。あの国からは、善良な人たちはいなくなってしまったのでしょうか」。厳しい表情でそう話した。

「ママは必ずやり遂げる」

滞在が長期化する可能性を見据え、日本語を学び、子ども向け英語教室で英語を教え始めた。3月からは都が実施するビジネス日本語と就業スキル向上の講座を受講する。

夫の健康状態が思わしくない。娘はまだ中学生だ。「英語教師の仕事で3人の生活を支えています。私が一家を支えるしかないんです」

「ママは頑張りすぎ。私には無理」と、娘のアナスタシアさんは言う。そう話す本人も地元の中学校に通いつつ、NGOが運営する日本語学習コースに参加し、さらにウクライナの学校から電子メールで送られてくる課題もこなす。



オレーシャさんの日本語学習ノートには「医師に成る」と手書きの文字。その上の「医師」の右には「イシ」という読みと「врач」（ブラッチ＝医者）の単語がロシア語で書かれていた＝2023年2月8日、和田浩明撮影

母のオレーシャさんは自分の日本語学習ノートに「医師に成る」と漢字と平仮名で書いている。日本でも医師として働いていくことへの強い思いがにじむ。アナスタシアさんが言った。「ママは本当に強い。決めたことを必ずやり遂げる。誇りに思っています」

【和田浩明】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagrophy」により著作権情報を確認できるようになっています。

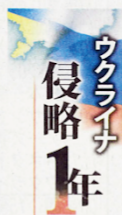
Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.

働きたい 避難者苦悩

言葉の壁、子育てと両立

ロシアによる軍事侵攻から24日で1年がたち、ウクライナ避難民の日本滞在が長期化する中、いまなお「言葉」と「就職」の壁が立ち上がり、生活の安定や今後の展望を見えづらくしている。仕事面では、祖国での資格や経験を生かせないミスマッチも顕在化。母親世代は子育てとの両立にも難渋しており、支援する自治体側には新たな対応が求められている。(外崎晃彦、深津響)

＝1面参照



日本で就職14%

ウクライナ北東部の街から昨年4月、千葉県に逃れてきたウリバチョバ・イリーナさん(40)はすぐに、異国で仕事を探すが「そんなに簡単ではない」と痛感した。避難民は「特定活動」の在留資格で就労が認められているが、日本で取得した資格が求められる職種も少なくない。祖国で弁護士資格を持ち、大学で法律を教えたイリーナさんも、弁護士活動はできない。得意の英語を生かせる職場を見つけようとしました

が、「やはり日本語が使えないことには難しかった」。現在働く東京都内の国際法律事務所で、同胞の避難民の困りごとをサポートする業務に就くまでに、3カ月かかったという。出入国在留管理庁によると、日本に滞在するウクライナ避難民は2185人(今年15日時点)。昨年11月23日時点で1849人が

特定活動の資格を持っているが、厚生労働省によると、就職したのは264人(14.3%)にとどまる。希望職種と合わない深刻なのが、希望職種と紹介される仕事のミスマッチだ。避難民の相談などに応じてきた日本YMCA同盟執行理事の横山由利亜さんは「祖国でのキャリアを生かせず、単純労働をあてがわれて悩む避難民は多い。仕事が安定しないため日本での生活に展望が見えず、不安を訴える避難民は少なくない」と打ち明ける。

自立見通し立たず 女性が全体の7割以上、18歳未満が約2割という避難民特有の事情も抱え、子育てとの両立が就職の障壁になるケースもある。東京都台東区の都営住宅に小学生のグレゴリー君(9)と暮らしているルブキナ・オクサナさん(50)は現在無職。日本語を流暢に話せるが、それでも希望に合う職が見つからないという。日本語がほとんど話せず、学校の友人も少ないグレゴリー君を放課後に一人にはできず、短時間・近所での仕事を探さざるを得ない。「自宅近くで探すと選別肢がほぼなくなる」とため息を漏らす。昨年3月の来日後、紹介された電話対応の仕事は通勤時間などの折り合いがつかず、飲食店の皿洗いも長続きしなかった。「支援金に頼らずに自立したいが、全く見通しが立たない」と戸惑いを話す。



日本とウクライナ国旗を持つウクライナ避難民のルブキナ・オクサナさん(左)と息子のグレゴリー君＝東京都台東区

立場も苦しい。「日本語ができなければ、どうしても単純労働を紹介することしかできない」。避難民支援を行う東京都生活文化スポーツ局の小野由紀担当部長はこう話す。

横山さんは「日本語レベル、子供や仕事の有無、年齢の違いなど課題が個別化し、それぞれに合う支援が求められる段階になってきた」と分析している。

「日本でも医師に成る」

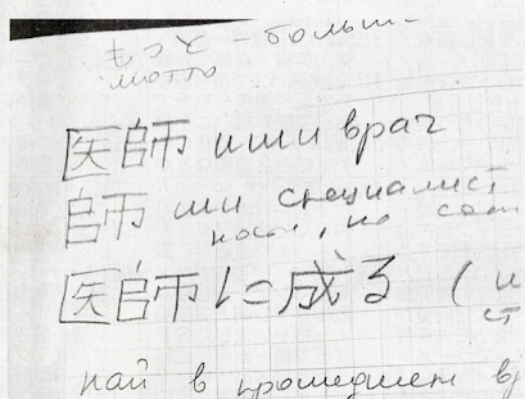
長期化を覚悟 日本語学ぶ

20年以上、麻酔の専門医として医療に従事してきた。8年前から医科大で麻酔学を教え、3年前には博士号を取得した。ウクライナ人の女性医師、オレーシャ・ポイツォワさん(42)の人生は順調だった。しかし、今は東京都内の3DKの避難者向け都営住宅に身を寄せ、漢字や平仮名の勉強に取り組んでいる。

ウクライナ 侵攻 1年

学習ノートを見せてもらった。漢字の構造を確認しながら書いたような大きな文字で「臓器」や「嘔吐」、医療用語の「好酸球」といった言葉がつけられている。ウクライナ人だがオレーシャさんが話す母語はロシア語。達筆なロシア語の筆記体で、読み方や意味をノートに書き込んでいた。

東京に避難 麻酔医の女性



⑤オレーシャさんの日本語学習ノート⑥3月から始まるビジネス日本語と就業スキル向上コースの受講許可書を手にするオレーシャさん(左から2人目)。右側はオレーシャさんの娘アナスタシアさんと夫アルチョムさん—東京都内で8日

期化、そして避難生活の長期化を覚悟しているからだ。2月上旬、避難先の都営住宅にオレーシャさんを訪ねた。「ウクライナでは20年間、麻酔の医者でした」。ベッドに座って、ゆっくり、だが、しっかりと日本語を披露してくれた。隣には夫の

アルチョムさん(43)、娘のアナスタシアさん(15)がびつたりと寄り添っていた。生まれ育ったウクライナ南部ザポロジエを離れ、親子3人で、日本にたどり着いたのは半年前。ロシア軍が郊外のザポロジエ原発を占拠し、攻撃は激しさを増していた。自宅から200メートル離れた場所にも砲弾が降ってきた。家族の安全を考えれば、脱出を決意せざるを得なかった。

日本に縁はなかった。避難希望者向けの交流サイトで、ゼ自分たちを攻撃し、戦争を

日本でも支援を受けられることを知った。欧州諸国にはすでに脱出者が殺到していた。欧州で支援を受けるのは容易ではないかもしれない。生まれてからずっと暮らしてきた場所を捨てることになる。戻るかどうかとも分らない。2週間悩み抜いた末に日本行きを決めた。

ウクライナではゼレンスキー大統領をはじめ、ロシア語を母語とする人が多い。オレーシャさんもザポロジエではロシア語で生活し、ロシアに親戚もいる。ロシア人と自分とは、重なり合うように近い関係だと思っていた。

それだけに、ロシア人がなぜ自分たちを攻撃し、戦争をやめようとしなのかが分からない。「いざれ終わるに違いない」。そう願っていた戦争は1年も続いている。

スマートフォンを見て目が疑った。1月14日に東部ドニプロで集合住宅がロシア軍のミサイル攻撃を受け、子ども3人を含む40人以上が死亡し約80人が負傷した。この

人道的被害について、ロシアの知人たちがネットに「ウクライナ人の数が、少なくなってきた」と書き込んでいた。2022年2月の侵攻開始のころ、ロシア各地では市民が抗議デモを繰り広げ、多数が拘束された。しかし今、反戦運動のニュースはロシアから伝えられなくなった。

「ウクライナはロシアになった方がいい」とネットに書き込んだ人もいました。私たちが敵視するのはロシア政府だけじゃない。あの国からは、善良な人たちはいなくなってしまうのでしょうか。厳しい表情でそう話した。

潜在が長期化する可能性を見据え、日本語を学び、子ども向け英語教室で英語を教えた。3月からは都が実施するビジネス日本語と就業スキル向上の講座を受講する。夫の健康状態が思わしくないので、娘はまだ中学生だ。「英語教師の仕事で3人の生活を

支えています。私が一家を支えるしかないんです」

「ママは頑張るすぎ。私には無理」と娘のアナスタシアさんは言う。そう話す本人も地元の中学校に通いつつ、NGOが運営する日本語学習コースに参加し、さらにウクライナの学校から電子メールで送られてくる課題もこなす。

母のオレーシャさんは自分の日本語学習ノートに「医師になる」と漢字と平仮名で書いていた。日本でも医師として働いていくことへの強い思いがにじむ。アナスタシアさんが言った。「ママは本当に強い。決めたことを必ずやり遂げる。誇りに思っています」

難民救援金募集

毎日新聞社と毎日新聞東京社会事業団は、紛争や災害、貧困などで苦しむ世界の人々を支援する救援金を募集しています。ウクライナ難民を人道支援する国連救援機関などに送りま

す。郵便振替か現金書留でお寄せください。物品はお受けできません。紙面掲載で「匿名希望」の方はその旨を明記してください。〒100-8051(住所不要)毎日新聞東京社会事業団「海外難民救援金」係(郵便振替00120-0-76498)